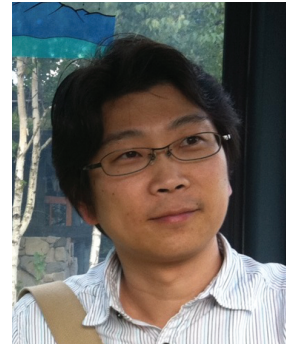


乳幼児の生活を見えるようにするには

北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター 准教授
川田 学 (かわた まなぶ)

Profile — 川田 学

2005年、東京都立大学大学院人文科学研究科（心理学専攻）博士課程単位取得満期退学。博士（心理学）。香川大学教育学部講師，准教授を経て，2010年より現職。専門は発達心理学。著書は『0123 発達と保育』（共著，ミネルヴァ書房），『子どもと食』（分担執筆，東京大学出版会），『小学生の生活とこころの発達』（分担執筆，福村出版），『卒論・修論をはじめめるための心理学理論ガイドブック』（分担執筆，ナカニシヤ出版），『親と子の発達心理学』（分担執筆，新曜社）など。



発達研究と「いつもの」子育て

私はもともと乳幼児期の母子相互作用の発達の変化を検討することから発達研究者としての道を歩みはじめた。そうした研究は，主に家庭訪問型の縦断的方法によって行われた。定期的に家庭に足を運び，3時間程度の滞在で，室内での観察やインタビューを実施するのである。

日本でも1970年代頃から盛んになったこうしたスタイルの研究では，多くの場合 free play paradigm が採用されており，母親と乳幼児の二者で玩具などを用いて，「いつもどおり自由に遊んでください」という教示の下で母子にカメラが向けられる。しかし，しばしば母親の口から「どういう風にしたら……」という言葉が漏れた。「いつものように」という研究者の期待のようには，母子（親子）は日常的に向かい合って遊び専用の時間を持っているわけではないので，戸惑ってしまうということだ。

そういうこともあり，私はもっと親子にとって生活的な必要感のある「いつもの」場面をもとに研究をすべきだと思うようになった。たとえば，そのひとつとして食事（離乳食）場面を選んだりした。食事は親にとっても子どもにとっても生物・社会・文化的な欲望の交差する場面であり，それゆえに free play では決して見ることのできない親子間の激しいコンフリクトや駆け引きが繰り返される。相互作用の中でも，特に親子が衝突するような場面での双方の行動とその発達の変化を見たいと思っていた私

には，食事場面は格好の対象であったし，しかも二者が食物や食器・食具を挟んで向き合う制約された撮影フレームが，（研究者の教示ではなく）自然に形成されるというのはビデオカメラによる観察研究におあつらえ向きであった。

しかし，おあつらえ向き，というのは落とし穴でもある。私はその後，家庭訪問型の研究から保育所や幼稚園など，乳幼児の集団生活の場に足を運ぶようになるにつれ，乳幼児期の親子が置かれた時代的文脈を意識するようになった。現代日本社会の親子にとって「いつもの」生活だということ，それを前提にした知見でもって発達理論を構築するだけでよいのか？ 家庭で養育されている乳幼児や親子の様子が，こんなにも観察しやすくてよいものなのか？

“弱さ”のバッファとしての多世代性

一方で，一市民の立場に立ったとき，乳幼児の生活の実相というものを知る機会は少なかった。私の場合，乳幼児と暮らすというリアリティを実感できるようになったのは，結局わが子が誕生してからのことであった。印象としては，「全然知らなかった世界が突然現れた」という具合であった。新鮮な驚きであると同時に，これでよいのだろうかとの思いも湧いた。子育てのリアルな営みが社会に見えていないこと，子どものいる生活圏と子どものいない生活圏があまりに分断されている社会に危機感を持った。

かつての大家族時代の食卓には，離乳食はま

だ少し先という月齢の乳児から、幼児、児童、青年、成人、そして歯が悪くなって堅いものが食べられなくなったであろう老人が、しばしば場を一にしていた。昭和の風景を持ち出して、規範的な家族像を謳おうという気は毛頭ない。ただ、注目したいのは、場の多世代性である。平均世帯成員数は第二次大戦直後は5人を超えていたが、近年は2.5人を割り込もうとしている。世代が子とその親でのみ構成されているとき、特に乳幼児と20代、30代の親が向かい合うとき、そこには能力の大きなアンバランスがあり、乳幼児の未熟さが一層露呈しやすくなる。それが現代の子育てを規定する一つの困難性ではないか。

乳幼児は未熟で失敗の多い発達期であり、親世代は人生で最も能力の充実した発達期である。もし、年齢に幅のある複数のきょうだい、祖父母、曾祖父母といった、親世代よりも発達のな“弱さ”を抱え込んだ存在がいると、乳幼児の未熟さは相対的に目立たなくなる。それは他の構成員も同じで、互いの弱さを少しずつゆるし合う雰囲気が生じやすくなるだろう。多世代性は、未熟期間の長い人類にとって、ゆっくりとした総合的発達 (holistic development) を保障する重要な資源であると考えられる。

乳幼児の生活が「見えない」社会

家族規模や世代構成の縮減は乳幼児の生活や発達に様々な影響を与えていると予想されるが、その影響を増強する要因として、乳幼児の生活が「社会に見えない」という問題があると考えている。諸氏は言うかもしれない。いや、そんなことはない、休日のショッピングモールに行けば、いやというほど親子連れを見ることができないではないか、と。確かに、そのような商業化された環境下では乳幼児が見えている。しかし、もっと乳幼児にとってのニッチな環境での生活、つまり乳幼児の生活時間の大部分を構成し発達に深く関与する、睡眠、食事、排せつと着替え、そして遊びの状況が、一般社会の、特に子育て世帯との日常的関係をもたない人々にどのくらい見えているだろうか。

たとえば、養育者が乳幼児の「寝かしつけ」

に苦労しているというとき、その内実は何のよなものか、一般にあまり理解されていない。「夜泣きは大変」ということで一括されてしまう。しかし、私の調査では、1～2歳の子をもつ保護者において、子の睡眠について悩みがあると答えた者が多く、悩みのほとんどは、「なかなか眠らない」という訴えであった。そして、子の睡眠の悩みが増えることと共生起の関係にあったのが寝かしつけ方法の変化であり、「絵本やお話をきかせる」と「自分も眠ることによる寝かしつけ」であった(図1)。特に後者の方法は、養育者としてはできるだけ避けたい最後の手段である。しかし、眠らない子どもを前に、少なくない養育者が“賭け”に出ざるを得ないというのが1～2歳と暮らすということである。

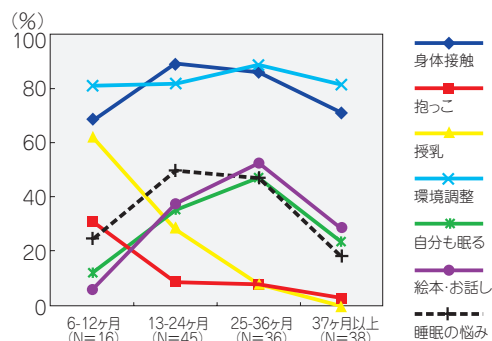


図1 0-4歳未満の子どもの寝かしつけ方法と子の睡眠に関する養育者の悩みの有無

こうした生活現実が、多くの人々には文字通り「見えない」ということが、今の子育てを包囲するもう一つの困難性ではないかと考えている。子育てを人類学的視点から研究してきた陳省仁氏は次のような例を挙げて、幼い子どもの代弁者の不在を警告している。「子どもの権利を尊重するために、真に子どものことを考える代言者が必要である。(中略)特に小さい子どもの真の代言者の不在ということは深刻といふべきである。ある国立大学に勤めているかつての同僚に聞いた話であるが、入試や委員会などの大学の行事のため、幼い乳児を持つ養育者が分配された職務を全うするため、子どもを犠牲にせざるを得ない状況は稀ではないという。些細のことと思われるが、人間の教育のことを最も大事にするはず、そしてそのことについて最

乳幼児の生活を見えるようにするには

も期待できるはずの知識人集団で起きるこのようなことは、まさに幼い子どもの権利の代言者の不在の事実を突き付けられたものである。これは現代日本社会の養育性の欠如の一例である」(陳, 2011, pp.1-2)

誰かの代弁者であるためには、その誰かのことをよく知っていなければならない。しかも、それは(たとえば、「親の教育力が低下している」というような)平板化された言説ではなく、主体の生活現実を知るということによって、はじめて適切な代弁が可能になるはずである。この社会における乳幼児の生活、乳幼児のいる生活現実が「見える」ということが、代弁者の育成の最低ラインであろう。

3歳未満児の生活についての社会的合意の脆弱さ

乳幼児の生活現実を可視化するために、ここで就学前児童の保育状況に関するデータを取り上げる。本稿ではこれまで「乳幼児」という言葉を使ってきたが、その生活現実を知るためには、この枠組みでは粗すぎる。なぜなら、就学前児童が日常の生活基盤とする社会資源の利用可能性が年齢と保護者の就労状況によって大きく異なるからである。図2を見ながら話を進めよう。まず、制度的な分断線は子どもの「3歳」という年齢にある。この年齢を境に、すべての子どもには学校教育の入口としての幼稚園教育への門戸が開かれる。ただし、今でも3年保育(3歳入園)を実施していない園が多い地域もあり、その地域の親子にとってその門戸は4歳になって開かれることになる。これも、個々人

にとっては無視できない生活現実である。

もう一つは保護者の「就労状況」が、乳幼児の生活基盤となる社会資源を左右する。すなわち、保育所に入所するか否かである。図2によれば、保育所に在籍している乳幼児数は増加傾向にあり、その増加率は3歳以上よりも3歳未満において目立っている(3歳児では4.4パーセントの増, 1,2歳児では8.6パーセントの増)。こうした傾向は、共働き世帯の増加と各自治体における待機児童対策により、保護者の一定期間の育児休業を経て1歳児や2歳児から入所する子どもが増えていることを示している。しかしながら、それでも2011年度のデータで0歳児の約9割, 1,2歳児の約6割半の子どもは基本的に家庭で養育を受けていることになる。なお、多くの私立幼稚園では満3歳児からの受け入れ, 3歳未満(生活年齢で2歳台)のプレクラスへの受け入れ等を行っており、保育所に通っていない2歳児クラス相当年齢の子どもの中にも、定期的に集団保育を経験している割合も一定程度ある。とはいえ、大多数の3歳未満児は在宅養育である。

3歳未満児の心身の発達は目覚ましい。しかし、その目覚ましさを保障することが今日非常に困難になっている。移動運動能力や表象機能の未発達な3歳未満児にとって、家庭は発達の基地であるに違いない。その意味では在宅養育の割合が高いことは有利な条件のようにも思える。だが、実際には上述したような困難性、すなわち育児の場の世代限定的構成と「見えない」育児、そしていまひとつ付け加えなければならない戸外環境のトランスファビリティ(“transferability”; 筆者の造語)とプレイビリティ(“playability”; 左同)の低さという困難性によって、家庭での養育がかつてないほどのハンディキャップを負っていると考えられる。

トランスファビリティとは、屋内と戸外の行き来のしやすさや、屋内と戸外のあいだでのコミュニケーションのしやすさを意味する。乳幼児が家屋のセキュリティや道路の交通等を気にしないで戸外と家を往復しやすいかどうか、養育者が家事をしながら戸外の子どもの様子を見

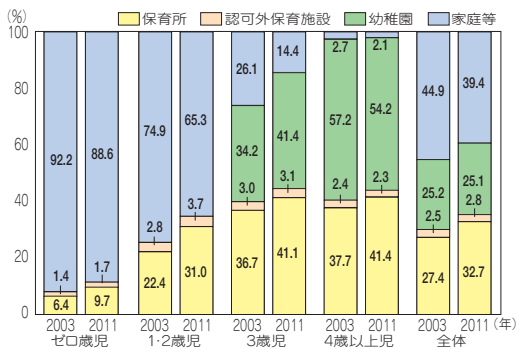


図2 就学前児童の保育状況 (全国保育団体連絡会・保育研究所編『保育白書2012年版』より)

たり聴いたりできるか、である。プレイビリティとは、戸外の公共の場での遊びやすさの指標である。たとえば、道端が子どもの遊び場として社会に認知されているか、公園に木登りに適した種類の木が植えられているか、というような意味である。この二つの指標は緊密に結びついており、仮にプレイビリティに富んだ公園があったとしても、自宅から公園までの道のりのトランスファビリティが低ければ、3歳未満児にとっての生態学的環境とはなりにくい。保育所や幼稚園といった環境は、基本的にトランスファビリティとプレイビリティを兼ね備えているはずである。そして、地域社会とのつながりを広げている施設も多く、多世代性や子育ての見える化も一定保障されている。したがって、今日保育所と幼稚園は乳幼児の発達の基盤を支える極めて重要な社会資源となっている。ただ、一方で、こうした施設に入らない限り、発達を保障する生活や遊びの環境が得られない社会に疑問を抱かざるを得ない。

なお、付言すれば、保育所や幼稚園がすくいきれてこなかった在宅養育の親子を受けとめてきたのが、近年「子育て支援」というジャンルで呼ばれるようになった実践である。2009年になって第二種社会福祉事業として法的に位置づけられたばかりであり、今後の発展が期待される実践領域である。

道端の落書き

以上の認識を踏まえ、最後に一つ実践的な提言を述べておきたい。それは「道端の落書き」である。第二次ベビーブーマーである筆者の幼少時代（1970年代～80年代前半の東京、神奈川）でも、未だ地域の異年齢遊び集団は存在したし、近所の道路は幼児から小学生の落書きでいっぱいだった。その落書きを見れば、誰が描いたか分かったので、人がいなくとも今しがた誰々がここで遊んでいたなという重要な情報を得られた。そこから類推して、近所の公園や駄菓子屋などいくつかのポイントを回ればほぼ必ず落書きの主を見つけることができた。落書きは、子どもの年齢情報も豊富に与えてくれた。

幼児は絵を描いたし、小学生は石けりやケンケンパ等で使うための枠を描いたりした（もちろんもっと悪い落書きもしたが）。

子どもによる道端の落書きは、地域の人々にその近辺に何歳くらいの子どもの生活しているかを知らせてくれる社会的マーカーである。落書きによって、子どもの生活の一端を垣間見ることができる。そして、道端が落書き可能かどうか、子どもの生活環境のトランスファビリティとプレイビリティの重要な指標ではないかと考えている。

しばらく前から、乳幼児健診等で赤ちゃんに絵本をプレゼントする等して、家庭での絵本の読み聞かせを推進しようとするブック・スタート事業が注目を集めてきた。私はこれとともに、子育てを社会の目の下で照らすためには、道端の落書きを推進する事業が必要ではないかと本気で考えている。ブック・スタートに対すれば、これはドローイング・スタート（drawing start）である。1歳児は道端の落書きができるし、好奇心旺盛に取り組む姿を観察することができる（写真）。9、10ヵ月健診か、1歳半健診の時に、環境に配慮されたチョーク一式が子どもに手渡され、「街は君のキャンパスだよ」と言ってもらえないものだろうか。

「みんなで子育て」する社会を実現していくためには、乳幼児にふさわしい生活を再吟味して、そのバリアとなっている環境を一つずつほぐして



写真 1歳児の道端ドローイング・スタート

いかなければならぬ。そのための入り口として、在宅養育されている3歳未満の子どもの遊びが、特に戸外遊びが保障されているかどうかは重要な視点ではないかと思う。

文献

陳省仁（2011）養育性と教育。『北海道大学大学院教育学研究院紀要』113, 1-12.